

自律学習におけるメタ認知ストラテジーの指導に向けて ー「学習記録」と「授業アンケート」の実践ー

追手門学院大学国際教養学部 佐 藤 恭 子

プール学院大学国際文化学部 権 瞳

プール学院大学国際文化学部 Alan Bessette

京都学園大学人間文化学部 有 馬 淑 子

1. はじめに

自己の学びの振り返りは、自律学習を成功へと導く大きな要因であるが、客観的な自己評価の態度はおのずと養われるわけではない。学習者が自分の学習について客観的に捉えるために、学習ストラテジーの一つであるメタ認知ストラテジーが使えるようにならなければいけない。本論では、このストラテジーの養成に学習記録がどのように効果があるのか、また授業アンケートに見られる授業や教師への要望、批判、改善点の提案といった他者評価の記録が、学習者自身の学びの振り返りにどのように生かされるのかについて論じる。

2. 自律学習に必要とされる学習ストラテジーと学習記録（佐藤他 2012a）

自律学習とは自分の学習について計画、実行、評価ができる学習を指すが、これを支える重要な要因として、メタ認知ストラテジーがあることが明らかにされつつある（e.g. 竹内 2003）。メタ認知ストラテジーとは、Oxford（1990）に代表される学習ストラテジーを構成する一つであるが、これまで筆者らは大学生を対象に、自律学習を主たる形態とする e-learning の学習実態調査を行ってきた。例えば、Bessette et al（2011）や権・佐藤（2012）では、コンピュータを用いた e-learning の学習行動を、PC 上の画面に表れる学習行動を録画により記録し、量的データを蓄積すると共に、それを裏付ける質的データとして学習記録の分析を行ってきた。それらの結果から、e-learning に見られる学習行動を裏付ける要因として、個々の学習者が有する特性、言い換えれば学習者要因が深く関わっていることが分かってきた。そこで佐藤他（2012a）では、多くの学習者要因のうち、英語学習に対する考え方、信条（ビリーフ）と学習ストラテジーに焦点を当てて調査を行った。そして、それらの要因と学習記録の効用について分析した。本論ではそのうちの学習ストラテジーと学習記録の結果について、以下で概観する。

2. 1. 学習ストラテジー調査

この研究では、関西の私立大学 2 校の 115 名を対象とし、学習ストラテジーの使用の実態についてアンケートを行った。用いた学習ストラテジーは、Oxford(1990)の Strategy Inventory for Language Learning (SILL) で、記憶、認知、補償、メタ認知、感情、社会の 6 つのストラテジーから構成されている。この調査では日本人英語学習者になじみがあると考えられる項目を中心に、6 つのストラテジーについてそれぞれ 5 問からなる合計 30 の質問項目を作成し、回答は「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」の 5 件法で求めた。結果を表 1 に示す。

表 1 学習ストラテジーの平均値と標準偏差

	記憶	認知	補償	メタ認知	情意	社会
平均値	2.646	2.652	2.506	2.444	3.054	2.954
標準偏差	1.024	1.088	1.010	0.900	1.031	1.005

(佐藤他 2012a : 160)

表 1 からは、学習者が情意ストラテジーを一番多く使っていることが分かったが、一方自律学習と重要な関わりを持つとされるメタ認知ストラテジーを十分には使っていないことが分かった。この情意ストラテジーとは、学習上の不安を軽減したり、自分を励ます等、学習上のストレスを低くするストラテジーを指すが、このストラテジーの中には「英語の学習について自分の気持ちを書きとめたり、記録したりする」という項目があり、学習者が記録をつけるという行動を取っていることが分かった。

これらの調査項目 30 項目のうち、フロア効果の見られた項目を除いた 29 項目に対して主因子法による因子分析を行った。スクリープロットと固有値から、5 因子構造が妥当であると考えた。そして、再度 5 因子と仮定して、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった 9 項目（.400 を下回るもの）を除外し、再度、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、以下の (1) から (5) の 5 つの因子（メタ認知・対面ストラテジー、記憶ストラテジー、自発的ストラテジー、学習環境設定ストラテジー、語彙補償ストラテジー）を抽出することができた。回転前の 5 因子で 20 項目の全分散を説明する割合は 59.15% であった。得られた結果を表 2 に示す。

表 2 学習ストラテジー因子分析結果：平均値と標準偏差

	メタ認知・対面	記憶	自発的	学習環境設定	語彙補償
平均値	2.11	2.62	3.49	2.71	2.73
標準偏差	0.60	0.77	0.74	0.78	0.81

(佐藤他 2012a : 発表スライドより)

5 つのそれぞれの因子を構成する項目を次にあげる。文末には平均値を挙げた。

(1) 第1因子：メタ認知・対面ストラテジー

- ・自分の英語学習の上達について考える。(M 2.25)
- ・英語の技能を高めるための明確な目標を持つ。(M 2.36)
- ・英語が分からない時ゆっくり話してもらうか、もう一度言ってもらう。(M 1.88)
- ・間違いに気づき、それを基にしようとして上達しようとする。(M 2.16)
- ・話をしていて適切な語が見つからない時、ジェスチャーを使う。(M 1.91)

(2) 第2因子：記憶ストラテジー

- ・新しい単語を覚えるのに、今まで学習した事柄と関連づける。(M 2.51)
- ・難しい単語は、いくつかの部分に分けて意味を考える。(M 2.75)
- ・新しい単語を覚えるのに、発音や使われる場面などをイメージして覚える。(M 2.43)
- ・新しい単語を覚えるのに、文を書いてみる。(M 2.79)

(3) 第3因子：自発的ストラテジー

- ・授業外でもメールを使って学習上のわからないところを教師に質問する。(M 3.90)
- ・積極的に英語のスピーチ大会に出たり、英語話者とのパーティーに参加して文化を学ぼうにする。(M 3.74)
- ・英語の学習について自分の気持ちを書きとめたり、記録したりする。(M 3.69)
- ・英語を勉強する仲間を作る。(M 2.73)
- ・楽しんで、英語の小説を読んだり、手紙を書いたりする。(M 3.40)

(4) 第4因子：学習環境設定ストラテジー

- ・英語学習において、間違いを恐れないように自分を励ます。(M 2.79)
- ・英語を使う時に自信がない時、リラックスするようにする。(M 2.80)
- ・新しい単語を覚えるのにテキストに出てきた箇所や、授業中の板書の位置などを手掛かりにする。(M 2.54)

(5) 第5因子：語彙補償ストラテジー

- ・一語、一語、日本語訳をしない。(M 2.74)
- ・英語を読むときに、新しい単語を一つ一つ辞書で調べない。(M 3.11)
- ・単語が思いつかなかった時、知っている語で言い換えたり新しい語を作ったりする。(M 2.34)

これらの結果をみると、3つ目の因子である「自発的ストラテジー」が学習者に一番多く使われていた。その他の項目として、「教師への質問」、「スピーチ大会やパーティーといった授業外での英語学習の参加」、「勉強仲間を作る」、「楽しんで小説を読んだり手紙を書く」があり、授業外でも自分から積極的に英語を用いる機会を求めていることが分かる。こうしたことは英語学習の楽しみにもつながり、動機付けが高くなると考えられる。

2.2. 学習ストラテジー：まとめ

これらの調査から、結果を以下の4点にまとめた。

- I. 授業外にも自発的に英語を学習しようとする態度が見られる。
- II. ただし、自律的学習のレベルには至っておらず、仲間や教師への依存性が見られる。
- III. 自分たちが学習しやすい環境を作り出そうとしている。
- IV. 意味の理解を補う補償ストラテジーは、語彙については使おうとしているが、話し相手に対する対面式のコミュニケーションは苦手としている。

2.3. 学習記録

ここで用いた学習記録は、①学習内容、②具体的な学習項目、③学習方法、④教材の活用方法、⑤学習の振り返り、⑥学習上の課題発見の6項目からなる。具体的な記録は、学習に熱心な学生に限られ、多くの学生の記述は一般的で、量も少なかった。以下に具体的な記述例をまとめた。

2.3.1. 平均的な学生の記述

6つの項目のうち、上で挙げた分類の①と③の記載が多かった。

①学習内容について

もっと勉強しようと思う／今回は学習出来なかったので反省／集中できない

③学習方法について

毎日コツコツと／予習・復習／できるだけ進める／毎日英語に触れる／少しでも英語を覚えたりして勉強時間を増やしていく

2.3.2. 熱心な学生の記述

具体的な記述が多くの項目で見られた。

①学習内容について

さぼってしまった分、取り戻して意欲的に頑張る／理解できるまで何度もやり直したい

②具体的な学習項目について

リスニングは耳だけでなく前後の文を読み解けた／全体を見て解くことが大事だと分かった

③学習方法について

分からない単語があればすぐに調べる癖をつける／総復習、確認の繰り返しを絶えずした／分かるまで何度も聞いた／英単語を辞書で調べることが習慣づいてきたので、これからも続けて行きたい／出来た箇所ももう一度やって本当に理解出来ているか試そうと思う

④教材の活用方法について

リーディング部分は画面だけでなく教材を印刷して理解できるまで勉強した／教材のヒント(vocabulary help)を用いて意味を調べた／教材の「辞書」機能や translation などを使いながら問題をやり終えることができるようになった

⑤学習の振り返りについて

出来た問題と出来ない問題がはっきりした／リスニングが全問正解だったので力がついてきてうれしかった／クイズ（小テスト）はよく読んでやったら、やっと8割を超えた／分からない単語の意味を調べて、分かった時の感覚がすごくうれしい

⑥学習上の課題発見について

リスニングの問題が先週も悪かったので、課題はリスニングだと思う／点数が悪くて悔しく、何故間違えたのかを見直して、弱い部分が分かった／問題が多く集中力がなくなってきたので数回に分けて行った／単語力と共に集中力も高めなければと感じた／ケアレスミスをしたので、落ち着いて見直しも必要だと思った／弱い部分が分かったのでそこを集中的に学習していこうと思う／知らない単語があったら、問題に直接関係していなくても調べて、語彙を増やしたい

2.3.3. まとめ

記録の分析の結果を次の4点にまとめた。

- I. e-learning に積極的な学生になるほど、記録内容が具体的になってくる傾向が見られた。
- II. 自分の弱点を発見し、次の学習に生かそうとする姿勢が見られた。
- III. 次に学習すべき項目を具体的に書きだすことができるようになった。
- IV. 自己評価では、課題だけでなく自分への励ましや学習がうまく行えた時の素直なうれしい気持ち表れ、次の学習の動機づけにつながる点も見られた。

3. 本研究での学習記録

3.1. 記録項目（資料参照）

佐藤他（2012a）の結果を基に、本研究では学習者の記録がより具体的になるように、記述例を提示し、（1）具体的学習内容と学習時間、（2）具体的学習方法、（3）成功した学習方法、（4）成功しなかった学習方法、（5）学習上の問題点、（6）次回の学習目標の6項目について、英語を専攻とする大学1、2年生に対して調査を行った。

3.2. 記録の分析

本研究では、記録を出来るだけ具体的に記述してもらうことを目標としたので、前回の記録内容に比べるとより具体的になり、学習の状況が明らかになった。結果を①学習項目、学習方法、②成功した・成功しなかった学習方法、③課題、④次回の目標の4点に分けてまとめる。

①学習項目、学習方法

記載例として語彙を挙げたため、結果的に単語に関する記述（電子辞書の使用、単語ノートの作成等）が多くなったが、その他に読解（日本語訳、英字新聞利用）や洋楽を聞くこと等が挙げられた。全体的には一般的な記述もあったが（資料集め、単語調べ、和訳を覚える等）、「単語を書いて

覚える」、「辞書を引かずに意味を推測」といった具体的記述が多くなった。

②成功した・成功しなかった学習方法

この項目については、学習者が自分の学習方法や学習に対する姿勢を振り返っていることが良く表れていた。例えば成功した学習方法として、「線を引いたり、マークをして内容理解の度を整理した」、「数日に分けて勉強を行った」、「疲れた時には休憩をした」が挙げられた。

また成功しなかった方法として、「まとめてやるのはだめだった」、「集中力が足りない」、「徹夜はしてはいけない」、「読む力がないので、読むペースが遅い」、「出来ないことを後に回すのは、結局はやらないことになる」等、自分の学習方法の課題に気付いたことが分かった。

③課題

課題として、学習の時間不足を指摘する記述が多く見られた。また学習がうまくいかない理由として、学習者をとりまく学習への環境（人に頼る、早くから課題に取りかかれず、先延ばしにする、集中できない、自分に対して甘い、分からないとやめる）が挙げられており、自己の学習に対する姿勢について客観的評価が出来ていたと思われる。

④次回の目標

目標としては、継続して学習することの重要性、計画性のある学習、時間の有効活用、具体的な学習スキルの向上、学習方法の具体的な工夫（日本語訳に頼らない、単語カードを平日、休日関係なく毎日見る習慣づけ、自分の頭で考えて学ぶ等）が挙げられた。この項目についても具体的な記述が見られ、身近な目標を設定する習慣づけが出来つつあることが明らかになった。

3.3. まとめ

これらの学習記録調査の結果、学習をした後で振り返る時間を持ち、それを記録にすることにより、学習者は客観的に自分の課題に気づき、目標を設定することが出来る様になったと思われる。そのことは主として自学自習型の形態を取る e-learning のみならず、従来型の対面式授業の自宅学習（予習、復習等）においても十分に使える可能性があることが示されたと考える。

4. 多様な授業評価の取り組み

これまで見てきた学習記録は、授業外で自分が行った学習内容についての評価であった。この章では、授業中も含めた自分の学習評価について考える。いわゆる授業評価は、主として教える側について、他者を評価する形態が主流である。そこには学生の授業への批判や要望などが数値や自由記述で示される。そして実施時期は通常、授業の終了時点であることが多い。しかしながら、授業に学生の声を反映させるのはそういったアンケートだけでは十分ではないことが多い。例えば大人数の授業で学生の反応を把握することは非常に困難であるが、毎回の授業で自由記載のアンケートを取り、学生の意見を次週の授業に生かすことは、教える側、教わる側の両者にとっても有効であ

る。

こうした考えの下、筆者はそうした取り組みを毎年行ってきたが、特に2012年度からは、アンケートの自由記述の内容を、毎回の授業で学生にスライドを用いて5分程度で示すことにした。そのことにより、学生は自分の意見が取り上げられ、改善されたことに満足し、その後より具体的な改善点を多く提示する傾向が少しずつ表れてきた。

さらに毎回のアンケートを実施する中で、学生の変化にも気付いた。それはアンケートの記述に、少しずつ「自分がもう少し予習していたら」、「自分がもう少しきちんと聞いていれば」といった表現が見られ始めたことである。つまり学習者自身にも改善すべき点があるのではないかと気付き始めた様子が伝わってきたのである。言い換えれば、他者評価から自己評価へと、学習者の視点が自然に移動したことに驚いた。ここに自己評価の重要性があるのではと感じ、色々なアンケート形式を考え、その効果を確かめることにした。

4.1. 授業振り返りシート

このシートは、毎回の授業の後5分程度で、授業への準備、参加度、理解度、態度を6段階で求めた。また次回の目標を自由記述で書いてもらった。結果としては、ほとんど考えずに該当箇所をマークするといった傾向が見られた。また自由記述も「次は頑張る」「次は予習をする」といった一般的記述に終わった。回答にもう少し時間を与える等の工夫や、数値を用いて回答を求めることの信頼性など改善が必要であることが分かった。

4.2. 自己評価シート

このシートは学期の最終週に実施した。項目として①これまでに取得した公的な英語試験の点数、②学期中に行ったクイズ（小テスト）の点数、③休んだ回数、④遅刻した回数、⑤提出した課題数と内容、⑥がんばった事柄、⑦あまりがんばれなかった事柄、⑧次の学期に頑張りたいこと、目標、⑨自己採点の9項目を挙げた。このシート作成の背景には、学習したことをファイルしておくいわゆるポートフォリオの完成があるが、まずはその前に、学習者が半年間の学習記録を自分で付けながら、自己評価ができる仕組みを考えた。印象的だったのは、自己評価が意外にも低かったと言う傾向である。このことが次回への動機付けにつながればと考える。次回からは試験の結果や課題といった学習成果物の保管も含めた指導を行いたい。

5. 終わりに

今回の調査から、学習記録を付けることによって、自己の学習に対して振り返り、学習方法についての長所、短所について気付くことができたと思われる。また自己の学習の目標設定がより具体的に出来るようになったことも明らかになった。得られた結果から、学習記録の実践がメタ認知ス

トラテジーの使用を促す一つの実践として効果的であったと判断できるだろう。また授業アンケートを通して、他者を評価することから自己を評価する視点へと自然な流れが生まれたことは新しい発見であった。今後はこれまでのアンケートの様式を見直し、自律した学習者養成のためのより効果的な教育的ツールとしてのポートフォリオ作成の開発へと取り組みたい。

＊本稿は、第18回大学教育研究フォーラム（2012年3月16日：「e-learningにおける学習ストラテジーと英語学習ピリーフ」）と日本リメディアル教育学会第8回全国研究大会（2012年8月29日：「メタ認知ストラテジーの養成へ向けた学習記録の活用」）において口頭発表した内容に加筆を施した。

なお本研究は科学研究費（基盤研究C 課題番号22520603：CALL学習における学習者の教材利用と学習ストラテジーについての実証的研究（研究代表者 Alan Bessette））の助成を受けている。

参考文献

- 1) Alan Bessette, Yoshiko Arima, Hitomi Kwon, Yasuko Sato. (2011). Improving learner use of CALL software, The CALL Triangle: Student, Teacher and Institution, EUROCALL, Nottingham, England, p.88.
- 2) 権瞳・佐藤恭子. (2012). 「CALL 学習における学習行動の実証的研究」, 外国語教育メディア学会 (LET) 第52回全国研究大会.
- 3) Oxford, R. (1990). *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*. Rowley, MA: Newbury House.
- 4) 佐藤恭子、権瞳、アラン・ベセッ、有馬淑子. (2012a). 「e-learning における学習ストラテジーと英語学習ピリーフ」, 第18回大学教育研究フォーラム発表論文集, pp.159-160.
- 5) 佐藤恭子、権瞳、アラン・ベセッ、有馬淑子. (2012b). 「メタ認知ストラテジーの養成へ向けた学習記録の活用」, 日本リメディアル教育学会第8回全国研究大会発表予稿集, pp.206-207.
- 6) 竹内理. (2003). 『より良い外国語学習法を求めて－外国語学習成功者の研究』, 松柏社.

資料

Learning Journal

No.

Name.

1. 学習したことは何ですか。具体的な学習項目（訳、レポート作成、試験の準備など）を書いて下さい。またどのぐらいの時間を使いましたか。学習時間を書いて下さい。
2. どのような方法で勉強しましたか。具体的に書いて下さい。（単語を覚えること、辞書を引くこと、日本語訳をすること、レポートを書くための資料集めなど）
3. うまく出来た学習方法は何ですか。具体的に書いて下さい。
4. あまりうまくできなかった学習方法は何ですか。具体的に書いて下さい。
5. 学習上の課題は何ですか。具体的に書いて下さい。（時間が短かった、分からない単語があっても辞書を使用しなかった、毎日出来なかった等）
6. 次回の学習の目標は何ですか。